

創薬・治療戦略への架け橋となる薬理研究
～病態解明による治療への薬理的アプローチ～

合田光寛,^{*,a} 山本由似^b

Pharmacologic Research for Bridging Drug Development and Treatment Strategy
～Pharmacological Approach to Treatment by Clarification of Pathology～

Mitsuhiro GODA^{*,a} and Yui YAMAMOTO^b

^aDepartment of Clinical Pharmaceutical Science, Graduate School of Medicine, Dentistry and Pharmaceutical Sciences, Okayama University, 1-1-1 Tsushima-naka, Okayama 700-8530, Japan, and ^bDepartment of Pharmacology, Graduate School of Pharmaceutical Sciences, Tohoku University, 6-3 Aramaki-Aoba, Aoba-ku, Sendai 980-8578, Japan

ここに記載されている総説は、2010年3月28日に岡山で開催された日本薬学会第130年会での大学院生シンポジウム「創薬・治療戦略への架け橋となる薬理研究～病態解明による治療への薬理的アプローチ～」で行った発表内容をまとめたものである。

近年、わが国では高齢化の進行に伴い、メタボリックシンドロームや精神神経疾患などの慢性疾患の増加が懸念されており、疾患の治療をより効果的にする新薬の創生が必要とされている。また、食品の安全性に対する国民の関心の高まりを契機に、安心・安全のための医療が重要な社会問題として取りざたされている。さらに、臨床現場における医薬品の適正使用のための薬剤師の職能の発揮にも高い期待が寄せられている。慢性疾患に対する治療効果の向上、副作用軽減や患者のQOLの改善などを目的とした、創薬や新しい治療戦略の創出のためには、基礎研究による病態解明と臨床での治療に対する薬学的アプローチがともに重要であると思われる。

そこで、本シンポジウムでは、「創薬・治療戦略への架け橋となる薬理研究」と題し、オーガナイザーである合田光寛（岡山大）、山本由似（東北大）に加え、臨床への応用を念頭に置き、薬理学を基にした基礎研究を精力的に行っている大学院生4名、

別府竜弥（福岡大）、名和文花（神戸学院大）、岩切詩子（九州大）、花園めぐみ（熊本大）が、前半では「抗インフルエンザ薬」、「糖尿病」、「精神疾患患者の薬学的管理」に関する副作用回避のための病態の解明や薬物の適正使用のための薬学的管理法を、後半では、「難治性咳」、「統合失調症」、「がん」に関する臨床応用を念頭に置いた新たな創薬標的となり得る薬理学研究の最新の成果について発表した。

また通常より長く設定した質疑応答時間には、それぞれの研究展望を広げるきっかけとなるような質問や研究結果に対する解釈の仕方に対する質問など、多岐にわたる分野の若手研究者や大学院生が積極的に討論・意見交換を行い、発表者、参加者ともによい刺激を受け、充実した時間を共有できた。

本シンポジウム並びに本誌上シンポジウムを通して、創薬を目指した基礎研究、臨床での薬学的アプローチがともに治療効果の向上には重要であることを再認識するきっかけとなれば、幸いである。

本シンポジウム並びに本誌上シンポジウムが薬学のさらなる発展と次なる薬学研究を担う若手研究者の成長につながることを期待したい。

最後に、本シンポジウムの開催並びに本誌上シンポジウムの執筆にあたり、貴重な機会を与えて頂きました日本薬学会第130年会組織委員長、土屋友房教授、並びに終始に渡り丁寧なご指導を頂きました日本薬学会役員の皆様、スタッフの皆様、そして今回ご参加頂きました各大学の先生方並びにご尽力頂きましたすべての方々に、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

^a岡山大学大学院医歯薬学総合研究科臨床薬学（〒700-8530 岡山市津島中1-1-1）、^b東北大学大学院薬学研究科薬理学分野（〒980-8578 仙台市青葉区荒巻字青葉6-3）

現所属：^a新潟大学大学院医歯学総合研究科薬理学分野（〒951-8510 新潟市旭町通1-757）

*e-mail: mgoda@med.niigata-u.ac.jp

日本薬学会第130年会シンポジウムGS05序文